

Title	スペイン語の時の節における叙法
Author(s)	近藤, 由佳
Citation	大阪大学, 2011, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/58305
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について <a>〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

両叙法が置き換え可能な場合もある。

(1) Levántate cuando te habla (直説法現在形) / hable (接続法現在形) una persona mayor.

[Porto Dapena 1991: 178]

(年配の人が話しかけてくるときは、立ち上がるものですよ。
／年配の人が話しかけてきたら、立ち上がりなさい。)

Porto Dapena (1991: 186) によれば、例文(1)では、直説法と接続法の置き換えが可能であり、両叙法の差異はニュアンスの問題であるという。つまり、基準時（＝発話時）においては、未だ年配の人から話しかけられていない聞き手に対しても、従節の出来事<年配の人が話しかけてくる>を、直説法と接続法を用いて表すことができる。このとき、<年配の人が話しかけてくる>が基準時において未だ起こっていない出来事であっても、接続法だけではなく、直説法でも表すことができるのである。この場合、直説法は非後時を表していないことから、時の節における叙法対立は、単純に非後時と後時で説明することはできないと言えるだろう。したがって、筆者は時の節における叙法を説明するために、さらに厳密な説明が必要であると考え、本稿で以下のように提案した。

直説法: 基準時⁴からの前時⁵、

そして基準時との共時（＝前時から近い未来時を包括する）を表す

接続法: 基準時からの後時への時間のズレを明示する

この概念を用いて、再度、例文(1)を説明すると次の通りである。従節における直説法は、従節の出来事をいわゆる一般的な事柄として提示し、このとき、共時、つまり、基準時の前時から近い未来時までを包括している。なぜなら、従節が表す出来事<年配の人が話しかける>は、基準時から見た前時から基準時まで繰り返され、広く習慣や一般的な事柄として認識されるようになるため、基準時からの近い未来時においても続くと考えられるからである。したがって、従節の直説法は近い未来時を表すことが可能であると考えられる。

一方、接続法は、従節の出来事<年配の人が話しかける>を、共時が包括する時間枠内に収まらない後時の事柄として表す、つまり、後時への時間のズレを明示すると考える。

【16】

氏名	近藤 由佳
博士の専攻分野の名称	博士 (言語文化学)
学位記番号	第 24794 号
学位授与年月日	平成 23 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当 言語社会研究科言語社会専攻
学位論文名	スペイン語の時の節における叙法
論文審査委員	(主査) 教授 木内 良行 (副査) 教授 郡 史郎 名誉教授 伊藤 太吾 神戸市外国語大学教授 福冨 教隆 准教授 長谷川信弥

論文内容の要旨

本稿では、時の節¹における叙法について、コーパス²を用いた統計的分析と記述的な見地からの意味分析を行った。スペイン語の叙法の中でも、時の節における叙法はとりわけ時間性を示すという特異性を呈すると考えられてきた。それゆえ、先行研究において、時の節の直説法と接続法は、非後時と後時という時間性を表すという対立で説明されると考えられてきた。しかし、次のように、不特定多数の聞き手を対象とした教訓など³を述べる時の節では、

このように、cuando 節以外の時の節においても直説法は基準時からの前時と共時を表し、そして接続法は基準時からの後時への時間のズレを明示するという仮説を立て、それを立証すべく、実例文の考察を行った。

とりわけ、先行研究において、これまで例外として扱われてきた mientras 節、antes (de) que 節、después (de) que 節、desde que 節における叙法についても、基準時からの前時、共時と後時への時間のズレによって説明することが可能であったことが示されたと考えられる、以下にその様相を示した。

第1章と第2章で扱った cuando 節と mientras における叙法については、直説法が基準時との共時と前時、接続法が基準時からの後時への時間のズレを表していた。cuando 節において接続法が現れるとき、主動詞には直説法未来形、直説法過去未来形、命令形、poder などのモーダル動詞といった後時指向の形式が用いられていた。

一方、mientras は cuando よりも広い時間幅を表すことから、mientras 節における直説法が表す共時の枠の幅も広く、ある程度遠い未来時の出来事もまた共時に含まれる。それゆえ、接続法は広い共時から外れた後時への時間のズレを明示する、結果的に基準時からはるか遠いかなたの後時の出来事を表すことになる。そのはるか遠いかなたの後時ゆえの不確かさにより、条件的な解釈が生まれると結論づけた。

第3章と第6章では、antes (de) que 節と hasta que 節における叙法について扱った。先行研究では、antes (de) que 節において常に接続法が現れる理由として、antes (de) que 節は常に主節からの後時を表しているからであるという説明がなされてきた。しかし、常に主節からの後時を表す hasta que 節においては、接続法だけではなく直説法も現れる。したがって antes (de) que 節が主節からみた後時を示すことを以てのみ従節に接続法が用いられると説明するには無理がある。そこで筆者は、García Fernández (2000) が表す「antes (de) que は más pronto como と同様に比較級である」という説を基にして、antes (de) que 節における接続法についての考察を行った。その結果、antes (de) que は「～より前」という時間性を表すその性質から、同節における接続法は、主節の出来事時を基準時として主節と比べて常に後時への時間のズレを明示していることが明らかになった。

一方、hasta que 節における直説法と接続法は、cuando 節と同様に、基準時（＝発話時、過去のある時点）からの前時、共時と後時への時間のズレを表しており、比較級である antes (de) que

節のように主節の出来事時を基準時とはしていないことが明らかになった。

第4章と第5章で扱った después (de) que 節と desde que 節の直説法現在形と接続法現在形は、cuando 節などと同様に基準時（＝発話時）からの前時、共時と後時への時間のズレを表す。なお、先行研究では desde que 節において接続法現在形は用いられないとされていたものの、コーパスにおいては2例のみ観察され、それらはどちらも説明書きの実例文においてであった。desde que 節は、主節の出来事の開始時点を示すことから、発話時以後の出来事に言及する実例が少ないことによると考えられる。

después (de) que 節の直説法過去形と接続法過去形はインフォーマントチェックから置き換え可能であるという結果を得た。このとき、después (de) que 節には el año pasado（昨年）といった前時を表す副詞句が現れ、主節を基準時として前時を表していた。また después (de) que 節ほどではないものの、desde que 節にもこういった基準時からの前時を表し、直説法過去形との置き換えが可能な「接続法」過去形が多く観察されたが、これらは、「直説法」過去形としての役割を果たしていると結論付けた。

第7章と第8章で扱った a medida que 節と tan pronto como 節は「～するにつれて」と「～するとすぐ」というように主節との出来事の時間関係を明確に表し、その時間性は a medida que 節と tan pronto como 節における叙法だけではなく、アスペクトにも影響を与えていることから、アスペクトについても詳細な言及を行った。その結果、発話時の前後に起こることについて言及するときに、主節と従節の明確な時間関係を示す必要があることから、a medida que 節と tan pronto como 節は非過去時制において多く観察された。また、アスペクトについては、a medida que 節には「非限界性」と「発展性」を表す動詞 avanzar や ir + 現在分詞の迂言形式が多く用いられ、tan pronto como 節には「完了」「後時」を表す llegar や poder が多く観察された。

したがって、時の節における叙法選択の基準についての結論は次のようになる：

直説法は基準時からの前時と基準時との共時を表す

接続法は基準時からの後時への時間のズレを明示する

この理論を用いて、先行研究では十分に考察されてこなかった説明書きの文、また、これまで例外とされてきた時の節（antes (de) que, mientras, desde que, después (de) que）における叙

法を含めた、本稿で扱った全ての例文を説明することができた。また、これまで行われてこなかったコーパスを用いた詳細な分析を行ったことも、本稿の特徴であると言える。

- ¹ 時の副詞節、時の従属節と呼ばれることもあり、cuando, mientras, después (de) queなどに導かれる節を指す。なお、Pérez Saldanya (1999) が、時の従属副詞節と呼んでいるものと等価である。
- ² 筆者の入力、作成したykコーパスとバルセロナ大学が作成したcorcoコーパスを用い、実例数が極端に少ない時にはCREA (<http://corpus.rae.es/creanet.html>) を使用する。
- ³ 教訓、またはレシピ、操作手順、法律を表す文を本章では「説明書きの文」と呼ぶが、こういった説明書きを表す時の節における直説法と接続法は置き換えが可能であり、非後時と後時という対立では説明が難しいと考えられる。なお、本稿では、説明書き文について、第一章で詳細に考察を行った。
- ⁴ なお、本章においては人によって定義づけが様々である参照時という用語を避けて、基準時を用いている。ここでの基準時は発話時と過去のある時点を包括している。
- ⁵ なお、時の節における直説法は共時以外に、基準時からの前時を表す。以下にその例文を挙げる。(…) y **tan pronto como se inicia la Reconquista, la España cristiana se incorpora a la creación europea de la Edad Media** (...) [1985, Marías, Julián, ESPAÑA] (そしてレコンキスタが始まるとすぐ、キリスト教の勢力下のスペインは中世のヨーロッパ創造に加わった。) この従節の出来事<レコンキスタがはじまる>は歴史的な出来事であり、基準時 (=発話時) からの前時を表している。

論文審査の結果の要旨

本論文は現代スペイン語の時の副詞節における叙法、とくに直説法と接続法の対立に関して、コーパスを活用しつつ意味の観点から分析を試みたものである。時の副詞節における直説法と接続法の対立については、従来から「後時」対「非後時」や「断定」対「非断定」等の説明がなされてきたが、しかし同じような意味内容の文でありながら両者の交替が見られることも少なくなく、実際の使用状況の広範な調査と、より一般性のある説明が求められてきた。本論文においては、1章から8章にかけてそれぞれ cuando, mientras, antes (de) que, después (de) que, desde que, hasta que, a medida que, tan pronto comoで始まる副詞節を含む文について、既存のコーパスに加えて独自に作成したコーパスを利用し、それらで得られた結果をもとに意味記述も含めた細かな検証が行われている。まず評価できる点は、まずその豊富な例文によって、また今まで漠然としていたそれぞれの副詞節における両者の使用状況について、動詞の意味内容との関わりも含めて具体的な生起分布を示すことにより、対象となった八つの副詞節それぞれについて交替の状況を具体的に明らかにしたことである。従来言われてきたような、ある接続詞はある叙法のみ (例えば antes (de) que, desde que)、他の接続詞は交替が自由と言った単純な議論は成り立たず、それぞれの副詞節は固有の意味を持つものであり、それが叙法の対立のあり方に大きな影響を与えていること、また叙法の選択においては文が個別の事象を表すのかあるいは総称文的かといった文全体の意味、語り方が常に密接に関わっていることが具体的に示されている。

ただ、筆者が説明で用いている「共時」、「後時」や「基準時」の考え方については曖昧なところがあり、また「後時への時間のズレ」というときの「ズレ」は説明を読む限りでは明らかにモダリティ的要素を含んでいると思われるが、説明が不十分であり、恣意的に見える議論も所々見受けられる。その部分をより厳密かつ明確にすることが望まれる。論文の構成についても、各

章ごとに基本概念の説明が繰り返されるなど冗長な部分が少なくない。また、5章の desde que における一見例外的な直説法過去と接続法過去との交替については更に議論を深める必要があろう。

しかしながら、それらの欠点は論文全体の価値を大きく損なうものではない。本論文の長所はまず何よりも、豊富な例文をもとに時の副詞句における叙法の対立のあり方を全体としてより明確に示すことができた点にあり、今後のスペイン語接続法研究に大きく寄与できるであろう内容となっている。以上のことより、審査委員全員は、本論文を博士 (言語文化学) の学位論文に値すると判断した。